

ふたり飯

中野和久

二十五年間も消息不明だった兄の居場所を知った私は、関東にあるその地へ向かった。それは、一家離散となった家族の因縁を清算する旅でもあった。

東京へ出たのは十数年ぶりだった。四十代前半までは会社の出張や家族とドイツ・ニーランドに行ったついでに観光地巡りもしたもののだが、役職に就き、子供たちの成長と共に上京する機会はなくなっていた。

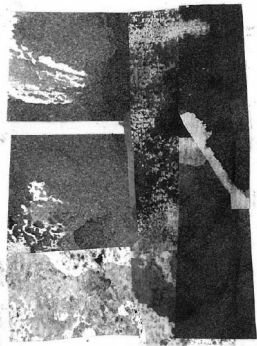
昼前の便で北九州空港から羽田に着き、バスで東京駅まで移動した。時間に余裕があったので、一息入れるためにレストラン街に向かう。

構内は過去の記憶など全くあてにならないほど広く、洗練された造りに変わっていた。もともと私の記憶は駅舎の

復元工事前の話だ。

通路の案内表示も小倉や博多駅と比べ物にならないくらいに多い。まさにお上りさんよろしくキョロキョロとしながら人ごみの中で歩を進める。数多い飲食店の中から軽食喫茶を見つけて入り、ミルクとサンドイッチを注文した。運ばれてくる間にスマホを取り出し、妻へ《東京まで無事に着いた。只今休憩中》とメッセージを送る。すぐに《よかった。気をつけてね》とニッコリとした顔文字付きで短い返信があった。

ミルクで玉子サンドを喉に流し込みながら、ネットで乗り換えを確認する。私の最終的な行き先はさいたま市の大宮だった。初めての土地である。そこである人物に再会するのがこの旅行の目的だった。



食事を終えた私は店を出て、京浜東北線に乗車するホームに向かった。間もなくやってきたJR九州では見かけない型の、スカイブルーのラインが入った快速に乗る。大宮までの所要時間は四十六分である。

車両に乗り込むと、さほど混んではいなかったが座席はほぼ埋まっていた。ポストンバッグとシオルダーバッグを荷物棚に置いて吊革を握ると、目の前に座っていた学生風の若い男が「どうぞ」と言って立ち上がった。乗り物で席を譲ってもらうことなど初めてで、ぎこちなく礼を言うと、彼は微笑して近くの扉付近に移動した。

まだ二十歳前後に見えるその若者は携帯や本を見ることもなく、スタンションポールをつかみ、凜として立ち尽くしている。先ほどの振る舞いといい、きつと立派なご両親に育てられたのだろうと私は想像した。

彼のぬくもりが残る座席に腰掛けてホッと息を吐くと、私はスマホを取り出して暗い画面に映る自分の顔を見てみた。そこには還暦間近な男のややくたびれた顔があった。二か月前の早期退職を機に髪を染めるのもやめてしまったので、ダークな画面でも頭部は鈍く反射した白髪が目立つ。少し角度を変えると、晩年の親父の顔に似てきたという妻の言葉に納得するものがあった。

電源を入れると私の顔は消え、待ち受け画面に今年の春

に生まれた初孫の画像が現れて心を和ませた。早産気味で体重も二 kilograms に届かずに生まれてきた男の子だが、その後は順調に育ってくれた。最近受けた六か月検診でも異常はなく、寝返りも上手にうち、そろそろ離乳食も始めるのだという。

娘が産んだ子なので生後三か月まで我が家で一緒に過ごしたこともあり、妻と共に色々と気苦労は多かったが、外孫の方が可愛いという言葉の意味も実感できた日々であった。

乗車して五分と経たないうちに電車は秋葉原駅に到着しようとしていた。私は車窓へ目をやり、ずっと以前に家族旅行でこの街を巡りまわった時のことを懐古した。

私の子供は二つ違いの長女と長男の二人で、当時は十歳前後だった。現在子供たちは二十代後半となり、それぞれ結婚して共に市内に住んでいる。

再び電車が走り出すと、久しぶりの旅行で少し疲れた私は、眠気を覚えあくびが出始めた。大宮まではあと四十分ほどある。腕を組んで目を閉じると、浅い眠りについた。

大宮に着いたのは、予約していた駅前のビジネスホテルにチェックインできる午後三時前だった。しかし私が遠方から来ているせいかわ、フロント係の若い女性は気持ちよく

受付をしてくれた。

五階の部屋に入ると私はジャケットを脱いでベッドに腰掛け、スマホで市内にあるという馴染みのない施設に電話を掛けた。

「はい。星雲寮です」

五回ほどコールして、まるで出前の電話を受けた店員のような軽い口調の男が出た。

「もしもし、あの、私はそちらにお世話になっております野原真治の弟で達男と申します」

私が名乗ると、男は自分の名は名乗らず、「あー、弟さんですね。役所の福祉課から話は聞いてますよ。もうこちらに着いたんで？ えーっと、お兄さんです、今夜大宮駅の近くにある『灘一本』って居酒屋で六時の待ち合わせを希望しています、よろしいですか？」

と、一方的に早口で話を進めた。私は了解し、店の場所を聞いて電話を切った。

二十五年間も音信不通だった兄の居場所が分かったのは、大宮区の福祉課から二か月ほど前に送られてきた生活保護の扶養照会からだった。

これまでも兄の消息は気になっていた。過去に借金や、アパートの家賃を滞納して行方をくらませることは何度か

あった。しかし、若いころなら仕事も何とか見つけれられるだろうが、六つ年上の兄はすでに六十五歳になっているはずである。いつ何時ひょっこり現れて金の無心をしてくるか、または今回のように行政から生活保護の扶養照会が来ないだろうかという不安が常に心の隅にあったからだ。

また実際に起こったことだが、兄が金を借りた怪しげな消費者金融からの執拗な取り立てまがいの行為に遭い、家族や勤務先にまで迷惑をかけてしまい、ほとほと参ったこともある。その時は弁護士に相談して難を乗り越えた。

もっとも一番の心配事は、孤独死などで警察からの遺体引き取りや後始末を要請されることである。だから、今回居場所が分かかって福祉施設で暮らしているという情報に胸を撫で下ろしたことは確かだ。もちろん扶養は出来ないが。しかし、兄の住所は簡単には教えてくれなかった。どうも本人が知られるのを拒んでいたようである。そこで私は考え、親類の死んだ報告や形見分けがあることなどを理由に会いたい旨を伝えた。すると福祉課や施設が仲介となって話をつけてくれ、今回の運びとなった。だから本人とはまだ電話ですら話はしていない。あと三時間後に居酒屋で四半世紀ぶりの再会というわけである。

私はベッドに横たわり、天井の点いていない照明器具を見遣りながら最後に兄と会った時のことを思い起こした。

それは二十数年前、父が脳腫瘍の手術をして退院した直後の夏だった。当時千葉県の船橋に住んでいた兄からたま自宅に電話があり、盆休みに友人と福岡観光や長崎の精霊流しを見に行く予定だと知らせてきた。

そこで手術に立ち会った私が父の病状を説明し、手術は一応成功したが腫瘍は全部取り除くことは出来ず、この先長くは生きられないことを告げた。すると兄の方から、では一緒に長崎の実家へ行かないかという話を持ち掛けられ、私は承諾したのだった。

兄は東京から新幹線でやってきたので、私は車で小倉駅に迎えに行った。小倉からは私の家族と一緒に車で長崎に移動するためだった。私の車は六人乗りのミニバンだったので都合が良かった。

当時、私は携帯電話を持っていなかった。一般的な普及率もまだ五割に達していなかった時期だったと思う。

約束の時間に改札から出てきた兄と数年ぶりに会った私は、その変貌ぶりに目を見張った。スマートで筋肉質だった体形は少し丸みを帯び、髪もゆるいパーマがかかったミディアムロングだった。切れ長だった目も、違和感のある二重に様変わりしている。一方、同行している友人の男は、逆にそこらへんにいるような三十前後の男だった。

当時兄は四十歳に達していたと思うが、ストライプ柄の

シャツを着こなし、まだ三十年代半ばだった私の無地なポロシャツ姿よりはずつとあか抜けていた。

兄は私の出迎えに對して、ほかの帰省客と同じように朗らかな表情を作っていた。それまでも借金を作って行方をくらましては数年後に何事もなかったような顔でひよっこりと現れたりしていたが、その時も久しぶりに会う兄弟といった感じの、ごく自然な態度だった。

兄は友人について、名前だけの簡単な紹介をした。私より若いと思われるその男と兄は、歳も格好も不釣り合いに思えた。

私は駅前の駐車場に止めていた車に案内した。私たちに気付いた妻が車から降りてきて兄に挨拶をした。妻は兄とは初対面だった。結婚式の時に案内を出したが、はがきは『あて所に尋ねあたりません』とスタンプが押されて返ってきていた。

兄とその友人は三列シートの二列目に座らせた。最後部の三列目は狭いので妻と二歳の長男が座った。助手席にはまだ幼稚園の年少組に通う長女が、長男と同じくチャイルドシートに鎮座した。兄は子供たちに駅の売店で買っていたお菓子やおもちやを与え、甥や姪の心をつかむことに成功していた。

車は九州自動車道を西へと走った。鳥栖JCTから長崎

自動車道に入ると交通量はかなり減った。車内での会話は少なかった。初対面同士が多いので無理もなく、暇を持て余していた子供たちも眠っていた。私も眠気を覚え始めたので次のサービスエリアでの休憩を妻や兄に告げようとルームミラーに目をやった時だった。

まず妻の眉をひそめた顔が目映った。その視線は前列に座る兄とその友人に向けられていた。二列目のシートは、三列目との移動がしやすいように間隔を置いた独立したシートになっていた。私がミラーを下方に動かすと、そこには兄とその友人が手を握り合っている姿が目飛び込み、私もどきりとする。

私は気付かないふりをして兄に休憩する意向を伝えた。兄は了解し、眠っていたと思われる友人を〇〇くん、と甘ったるい声で起こした。

パーキングエリアで私たち家族はハンバーガーが食べられるコーナーに座り、兄とその友人は豚骨ラーメンが食べたいと、別の店に移動した。二人の姿が遠のくと、向かい側に座る妻が耳打ちしてきた。

「ねえ、見た？ お兄さんと友達の人が、車の中で手をつないでいたのを」

嫌悪というより好奇心に満ちた声質だった。

「ああ……」

「お兄さんって、元々そういう趣向を持っていらしたの？」

私は、子供たちにお冷を与えながら答えた。

「いや、分からないな。なんせ、一緒に暮らしていたのは子供のころだけだったしな」

私たち兄弟は、私が小二、兄が中二の時に親の離婚によって児童養護施設に預けられた。父に引き取られた私たちが、当時父は景気の良かった以西底引き網漁船で働いており、一度東シナ海に漁に出ると二か月くらいは家に戻らなかつた。久しぶりに帰港しても、一週間もしないうちには再び出漁していく。だから子供の養育は無理だったのである。一方母の方は、離婚の原因となった愛人と共にすぐ土地を離れたらしく、音信不通となった。

父親の不在には慣れていた私たちがだったが、唐突な母親との別離は、母に捨てられたという絶望にも似た悲壮感に、その後もずっと苛まれることになった。

長崎港が見渡せる高台の場所にあったそのカトリック系の児童養護施設には、天涯孤独のみなしごから親から虐待を受けていた子供、また私たちのように家庭の事情で親と一緒に暮らせない満二歳から十八歳までの五十人ほどが暮らしていた。

そこでの生活は慣れるまでは大変だったが、温かい食事

と寢床が用意され、やや窮屈な団体生活も同じような境遇の子供たちと仲間意識が芽生え、割と楽しく過ごすことが出来た。ただし、それは中学か高校を卒業するまでの期間であり、施設を出てしまえば厳しい現実の世界が待っている。

兄は中学を卒業すると、住み込みの仕事を見つけて働くことになり施設を退所した。たしか繁華街にある大きな酒屋だったと思う。昼は配達業務をし、夜は就職する際に店主と交わっていた約束通りに定時制高校に通っていた。だが、店がネオン街の近くにあったこともあって仕事は遅い時間まで続き、また店主の学業への理解のなさも重なって学校へ行ける日が少なくなっていた。

そのうち仕事との両立が困難となり、一年も経たないうちに学校を辞めたと聞いた。しかし、私の所には時々会いに来てくれたが、そのことに対して愚痴を聞いたこともないし、好きな女がいるとか、そういう浮ついた話を耳にしたこともない。もつとも、当時私はまだ十歳ほどの小学生である。ただ、兄から暴力や暴言を受けた記憶がないということは確かだ。一言でいえば、優しい兄だった。

当時の兄に対しては同性愛者とか性同一性障害などという印象はない。施設でも性別に関係なく誰とでも仲良くやっていたように思う。しかし社会に出た後、仕事柄配達

で色んな飲み屋に出入りしていた関係もあったせいとか、十八歳になると酒屋を辞めてあるキャバレーにボーイとして勤めだした。どうやら、その支配人に声をかけられたらしい。

今思えば、そのころから兄は少しずつ変わっていったように思う。いや、もつと遡れば、子供のころには気が付かなかったが、兄の心の傾斜は、私が物心ついたころには垣間見えていたように思える。兄は思春期の前半までに家庭崩壊の経過をまざまざと見せつけられて育った。親が離婚した決定的な理由は母の不貞にあったわけだが、それに至るまでの父の遊び癖やDVも顕著だったことは、まだ幼かった私の脳裏にも断片的ではあるが焼き付いている。

私は幼すぎたせいとか、当時はただ寂しかった、怖かったなどの単純な感情しか抱いてはいなかったが、思春期を迎えると、普通とは違った自分の生立ちを振り返るようになった。そして数々の疑問が込み上げてきたのだった。

——なぜ私たちは一家離散となったのか？

さらに大人になると、当時の両親や兄の心情に分け入りたいという思いがふつふつと沸き起こってきた。だが、いくら血を分けた肉親とはいえ、幼児期の記憶だけで掘り起こすことは困難だった。だから今回の兄との再会は、これらを少しでも清算できる最後のチャンスだと思っている。

窓の外から救急車のサイレンの音が近づいて来たと思うと、すぐに遠ざかっていった。再び部屋に静寂が戻ると次第に追憶のスクリーンも幕を閉じ、いつしか私は微睡ましろんだ。

一時間ほど転寝をした私は、シャワーを浴びてホテルを出た。待ち合わせの居酒屋はネットで検索すると三百メートルほどの距離だった。約束した時間の十分前には店に着く。

兄が利用している施設の職員からは予約をしているという話を聞いていたので、私は店に入って店員に名前を告げた。すると和風の作業衣を着たアルバイト風の若い女は、「あ、はい。お連れ様もお見えになっています。こちらへどうぞ」

と私を個室ブースの方へ案内した。平日だったがすでに店内は賑わっており、あちらこちらから談笑の音が耳に届いた。奥へと進んだ店員は突き当りの部屋の前で止まり、

「失礼します。お連れ様がご到着されました」

と声をかけた。返事を待つ間もなく店員が障子を開けると、掘りごたつ式の席の向こう側に、ニット帽を被り眼鏡をかけた中老の男がいて目が合った。顔が良く見えず兄の面影を感じ取れなかったので、一瞬部屋を間違えたのではないかと戸惑う。

やや間があつてその男が右手を挙げて目を細めると、店員は、

「では後ほどご注文を承りに伺います」

と言つて姿を消した。私が言葉を探して立ち尽くしていると、兄は小さく手招きをした。

「久しぶりだね。さ、座つて」

私は「うん」と短い返事をして部屋に入り、対面に腰を落とした。

間近で見た兄は年相応に老けてはいたが、顔はふっくらとして血色も良さそうだった。ニット帽の下端からはみ出している髪の毛は染めたのか不自然に黒かったが、帽子をかぶったままなのは多分、薄毛隠しなのだろう。眼鏡を外し、兄が語りかけてきた。

「元気にしてた？ 少し痩せたんじゃない？」

「ああ……ちよつと糖尿病になつてね。そつちは元気そうやね。あ、これ土産。量が足りるか分からんけど」

私は持参してきたカステラの二本組の箱が二つ入った紙袋を渡した。袋を覗き込んだ兄が目を輝かせた。

「わあ、長崎のカステラなんて何年ぶりかなあ。寮のみんなも喜ぶよ、ありがとう」

私はここへ来る前に、兄が寮と言つた施設のことをネットで調べてみた。するとそこは無認可の無料低額宿泊所で、

さまざまな問題で告発されていることも分かった。一応、福祉施設とはなっているが、いわゆる『貧困ビジネス』と呼ばれる事業所のようなものだ。

「あのさ、兄貴が住んでいるその寮ってのは——」

そこへ店員が注文を取りに来た。先にメニューに目を通していた兄が、とりあえず生ビールと刺身の盛り合わせを頼んだ。

「まあ、九州より魚は落ちるけど肉や野菜は美味いよ。今の時期だったらナスかな」

と、兄は私にメニューを渡した。せっかくなのでナスの揚げ出しを選ぶ。その次のページに、手羽元チューリップのから揚げの画像があった。私はそれを兄に見せて言った。

「これも注文しようか？ 兄貴、鶏肉が好きやったよな」

兄は目を見開いた。

「え？ よく覚えてるねえ。達坊はたしか、カレーが一番好きだったよね」

兄は、私のことを子供のころから達坊と呼んでいた。成人してからもそれは変わらなかつた。考えてみれば、私の方も兄のことをずっと兄ちゃんと言っていた。兄貴と呼んだのは今日が初めてだったかもしれない。

「ん？ いや、カレーはみんな好きやろ。俺が施設で好物だったのは、ハンバーグやったよ。まあ、これも嫌いな

子供はいないか」

兄が相好を崩して言った。

「でも施設のはさ、豆腐でかなりかさ増ししてたの知ってた？」

「あー、どうりでやけに柔らかかったな。でも味は良かった」

そこに生ビールとお通しが運ばれてきた。私たちは「じゃあ」っと静かに乾杯した。兄は一口飲むと小さく「あーっ」と快味な声を出し、お通しの塩だれキャベツを摘んだ。しかし満悦のところ悪いが、このまま思いつ話に花を咲かせるだけで終わるわけにもいかない。私はジョッキを置いた。

「ところで、兄貴は親父が死んだことは知つとつた？ もう二十年近く前になるけど」

私が切り出すと兄の顔から笑みが消え、伏目になった。「……うん。風の便りでね」

父が死んだ時、すでに兄の携帯は解約されていて私は連絡がつかなかったが、兄にも長崎に友人や仲の良い従妹がいたので、誰かから聞いたのだろうか。兄が尋ねた。

「それで、葬儀の喪主は誰がしたの？ 由紀恵さん？」

由紀恵とは父の内縁の妻で、私たちが一緒に長崎へ帰省した際に父から紹介された人物だった。その女性は、父と

昔一緒に船に乗っていた元同僚の未亡人だと言っていた。

「いや、俺がやったよ。由紀恵さんは献身的にずっと親父の看病をしてくれていたし、籍は入れてなくても事実婚って言えるもんやったから、俺はそのまま実家に住んでもらっていいし、遺族年金なんかの手続きにも力添えすると言ったんやけど、結局は初盆のあとに故郷の彦岐島に帰ったよ」

「実家は今、どうなってるの?」

「もう更地にして土地も売ったよ。まあ二束三文やったけどね。相続人の兄貴がいなかったから手続きが面倒かと思っただけど、親父が遺言書を残しておいてくれたおかげで割とスムーズにいったよ。悪いけど、遺言で兄貴は相続から外れとる」

兄は無言で頷いた。

「それと、借金はなかったけど預貯金はわずかで、葬儀代を払ったらほとんど残らなかったよ。不満なら、遺留分請求の申し立てが家庭裁判所に出来るかもしれないけど?」

兄は視線を落としたまま、ゆっくりと首を横に振った。遺産相続の話になったところで、私は兄がどういった反応を見せるか興味深く思っていたが、目立った態度は示さなかった。

「それから生命保険から出た金は由紀恵さんが受取人

やった。彼女はそれだけで十分だと言うとったよ。遺族年金の方は、先に亡くなったご主人の分があるらしい」

「……」

話が一区切りついたところで刺身の盛り合わせが運ばれてきた。私は先ほどのナスと鶏肉を追加で頼んだ。兄がすっかり意気消沈したようなので、私は話を変えることにしてシヨルダーバッグのフアスナーを開いた。

「これ、実家を片付ける時に出てきた兄貴のアルバム。最後の方に親父の葬儀の写真を追加しているから。それと、一緒に長崎に帰省した時に撮ったホームビデオをDVDにしたもの。ほら、実家でみんな揃って飯を食ったり、庭で花火をした時のが映とる」

兄はアルバムを手に取りるとまた目を輝かせた。ほとんどは児童養護施設時代に撮られたモノクロ写真で、それ以前の写真はあまりない。父が船乗りで家にいることが少なかったし、離婚後に母が写り込んでいる写真は処分されたようで、家族写真などはないに等しかったからだ。

少し色が落ちたマグロの刺身をひとつ口に入れた。ほどよい脂があつて味は悪くない。兄は施設で暮らした最後のクリスマス会での集合写真を見つめている。毎年のように行われていた聖劇のあとに撮られたものだ。

その時兄はイエスの父となるヨセフ役で、私は羊飼いの

役だった。兄の隣にいる主役のマリアを演じた京子という女の子はとても美形で、当時はまだ中学生だったが、どこか大人びていてすでに色気もあった。施設を退所後はすぐに水商売の道に入って中洲でのし上がったと聞く。私はアルバムを指して言った。

「園長も、職員の吉竹さんも濱田さんも亡くなったらしいよ。まあ、皆さん八十歳前後やったから仕方ないね」

兄は瞑目してアルバムを閉じると両手に持ち直し、頭を下げて紙袋に仕舞った。同じタイミングで注文した料理も届く。私は早速ナスを口に入れた。揚げたてで美味かった。

「あ、典夫叔父さんも十年位前に脳卒中で亡くなったよ。従妹の清美姉ちゃんとは、今は年賀状のやり取りをする程度やけど、お孫さんと一緒に暮らしていて元気にしとるみたい」

兄は小刻みに頷くとビールをちびりと飲み、
「いつか長崎に帰って、墓参りしないといけないと思っ
てはいたんだけど……」

と妙な面持ちで言った。湿っぽい話が続き、私も気が重
くなってきたのでまた話題を変えることにした。

「そうそう。俺に孫が出来たことはさすがに知んやろ
う？」

兄がぱっと顔を上げた。

「香織ちゃんの子？ それとも貴裕くん？」

「うん。二人とも結婚したんやけど、初孫は香織の子供。
男の子でね。今、六か月」

私がスマホに保存している孫や家族の画像を見せると、
兄は食い入るように見つめて頬を緩めた。

「そっかあ。二人とも立派になって。みんな元気そうで
よかった。赤ちゃんの名前は？」

「太陽の陽に太いと書いて、陽太」

「そう。陽太君は達坊の赤ん坊のころによく似てるなあ
……ふふ。ところで、こっちにはいつまでいるの？」

「ああ。兄貴の体や今の生活に問題がなければ、明日に
でも帰ろうと思ってるけど」

兄は、から揚げを摘まんで言った。

「別に何も無いよ。体も前立腺肥大症の薬は飲んでい
けど、特に悪くはない。ただ、仕事をしたくても寮では禁
止されているから退屈なんだよ。でも昼だけ寮の賄いを担
当しているから、わずかだけどお茶代ってことで小遣いも
みんなより少し多いんだ」

兄は中学に上がるころには焼き飯やうどんなどの簡単な
料理は作ることが出来た。いや、正確には出来るように
なったというところか。大人になってからも水商売の世界
が長かったので腕を磨いたのかもしれない。それはそうと、

兄はいいタイミングで貧困ビジネスの方に話を向けてくれた。

「その働くのが禁止ってどういう意味かな？ 生活保護をもらって健康体なら、逆に仕事をするように役所から言われるんじゃないか？ それに、小遣いって誰が出してるん？」

兄は視線をそらしながら答える。

「みんな寮長から毎日五百円貰っているんだ。さつきも言ったけど、賄いの手伝いをしているからプラス三百円。タバコもパチンコももうやめたから、缶チューハイとつまみや茶菓子なんかは十分買えるよ」

「いや、小遣いって、そもそもそれは兄貴が生活保護で受けた金やろ？ なんでその寮長とかが管理しとるわけ？」

それに一日五百円って……。実際には生活保護費って月にどれくらい支給されとるんね？」

「ああ、多分、十三万くらいかな？ でも役所で支給されたら、すぐに外で待っている寮長や職員の人に封を切らずに袋ごと渡さないといけないんだよ。だから、細かい金額や内訳は兄ちゃんには分からないんだ。仕事をしてはいけない理由は、収入があった場合は役所に申告して、その分生活保護費からカットされるから、寮長がダメだって言うんだよ」

兄は自分のことを以前のように兄ちゃんと言った。話しながら時々首をビクッと動かす仕草は精神科や心療科でチック症と呼ばれるもので、兄が緊張したりバツの悪い話をする時の昔からの癖だ。

「十三万も出て、自由に使える金が一日に千円以下だなんて、おかしいと思わんの？」

兄のチックの動作が増してきた。かなり動揺しているようだ。

「宿泊代に食事代、光熱費の分なんかを差し引かれるから仕方ないよ。それに、病気になれば病院にも連れて行ってくれるし、文句は言えないさ」

「じゃあ、不満はないってこと？」

兄はジョッキの残りを呷った。

「ないね。あそこにいる限りは粗末でも食事や寝床は困らない。医療や介護サービスも受けられるし、死んだら火葬の手続きもしてくれる。行き場のない人間にとっては救いの場所さ。それに、もう歳も六十五になったから役所も仕事のことはいうるさく言わなくなったよ」

私はトーンを下げて言った。

「俺、調べたんやけど、兄貴の利用している施設って無認可の無料低額宿泊所やろ？ 最近よく耳にする貧困ビジネスってやつじゃないかって心配しとるんやけどね」